

構文の項としての懸垂ヲ格

今野弘章（奈良女子大学）

「親の形見を何してんだ！」のような「Xヲナニスル構文」は、統語的認可子を持たないヲ格「懸垂ヲ格」を含む、項の認可元を辿ることが困難な現象である。本発表ではXヲナニスル構文における懸垂ヲ格の認可の問題を検討し、懸垂ヲ格が、なんらかの他動詞との補部-主要部関係によってではなく、当該構文の語用論的機能によって認可される（[1], [2]）ことを主張する。さらに、その主張が構文文法における意味での「構文の項」（[3]）に関する日英語対照研究に対して持つ意味合いを考察し、これまで分かっているもの（[4]）とは逆の状況、すなわち日本語が構文の項を認可する環境において英語ではそれが不可能な場合があることを指摘する。引用文献：[1] Jackendoff (1990) *Semantic Structures*; [2] 天野 (2011) 『日本語構文の意味と類推拡張』；[3] Goldberg (1995) *Constructions*; [4] Washio (1997) “Resultatives, Compositionality, and Language Variation,” *JEAL* 6.

連体修飾節化の可能性の階層に関する量的考察
—NPCMJ を用いた分析結果より—

世良時子（成蹊大学）

本研究は、統語解析情報付きコーパス NPCMJ(NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese) を用い、連体修飾節化の階層について、量的な検証を試みたものである。1)連体修飾節の主名詞には、主格と目的格の名詞のどちらが多く出現するか、2)コーパスから得られた出現率の階層は、既に述べられてきた階層性と一致するか、の 2 つの課題を設定し、分析を行った。1)は、主語を主名詞とする連体修飾節の出現率が圧倒的に高かった。主語助詞句よりも目的語助詞句の出現率が高かったテキストジャンルにおいても、主語を主名詞とする連体修飾節が明らかに高い割合で出現していた。2)は、出現数の多い順に「主語>目的語「を」「が」>場所「に」「で」「が」>時間「に」>第二目的語「に」>派生された主語>派生された第一目的語>非使役者「を」/主題>第二主語「が」/論理的主語/数量名詞」となり、量的分析においても、既に述べられてきた階層性と合致する結果が得られた。

話し言葉における「好きだ」構文の対象語を示す形式と情報構造の関係
—ガの焦点化の機能に着目して—

池田 尋斗（関西大学大学院生）

話し言葉において「好きだ」構文の対象語を標示する形式には、格助詞ガ・ヲの他に、助詞が用いられない形式（以下φ）やノコトが挙げられる。これらの形式うち、ガは焦点化の機能を持つため対象語焦点では問題なく使用されるが、その他の情報構造では使用が避けられる場合があると考えられる。本発表では、対象語焦点以外の情報構造でガの使用が避けられる場合に、φ、ヲ、ノコトのうちどの形式が格標示を担うかを検証する。調査には、対象語焦点、題述焦点、述語焦点、修飾節焦点の例文について、格標示の形式ごとの使用率を問うアンケートを用いる。格標示の形式のうちφ、ヲ、ノコトを比較した結果として、①ノコトは全ての情報構造で最も使用率が高いこと、②φは題述焦点でのみヲの使用率を上回ることを指摘する。この結果から、題述焦点の場合はノコトとφ、述語焦点あるいは修飾節焦点の場合はノコトとヲが、ガの使用を避ける場合の格標示を担うということを主張する。

キャラ語尾と節の周縁部

森山倭成（神戸大学大学院生/日本学術振興会特別研究員）

日本語は話し手の属性を表す文末標識を豊富に有する言語である。このような文末標識はキャラ語尾と呼ばれ、役割語の一部として主に社会言語学的な観点から研究が進められてきた（金水 2003）。本発表では、統語論的な観点からキャラ語尾について論じる。定延（2007）は、キャラ語尾をキャラコピュラとキャラ助詞の二つに分けているが、本論では、キャラ語尾は二分類ではなく、大きく分けて三つ、細かく分ければ四分類できることを示す。さらに、カートグラフィーの観点から、キャラ語尾に CP の投射と連動するものと連動しないものがあることを示し、理論的考察を加える。

<参考文献> 金水敏. 2003. 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』東京:岩波書店./ 定延利之. 2007. 「キャラ助詞が現れる環境」金水敏(編)『役割語研究の地平』27-48. 東京:くろしお出版.

コピュラ文と存在文に現れる非指示的名詞句の意味的性質

三好伸芳（実践女子大学）

日本語における名詞句の解釈については、西山（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論』（ひつじ書房）による指示理論に基づく分析が知られている。西山によれば、「犯人は太郎だ」における「犯人」、「眠れない人がいる」における「眠れない人」は、いずれも命題関数を表す非指示的名詞句（変項名詞句）であるとされる。

しかし、コピュラ文と存在文に見られる名詞句には、次のような相違点がある。

(i) a.?? どんな難問も解けてしまうような研究者は太郎だ。

b. どんな難問も解けてしまうような研究者がいる。

(i) に見られる容認性の違いから、これらの環境における名詞句の意味論的性質が異なっていることが示唆される。本発表では、このような現象の観察をもとに、存在文に現れる非指示的名詞句は存在を前提としない不特定名詞句であると主張する。

自動詞専用の傾向を示す自他両用漢語サ変動詞の他動詞用法
- 「減少」「増加」を中心に -

楊健(神戸市外国語大学大学院生)

本発表は「増加」「減少」のような自動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞に注目し、これらの動詞の他動詞用法に制限が見られる理由を探るものである。金英淑は「他動詞用法が可能な場合、主語と目的語の間には再帰性、再帰的な関係が存在する」と指摘していた。しかし、他動詞としての使用制限をすべて「再帰的な関係」で説明することは難しいと考えられる。本発表は西村による他動詞文のプロトタイプにおける<意図><行為><変化><責任>の4要素を参照すると同時に、姚艷玲が提唱する「個体化された二者間のコントロール」という他動詞文のスキーマにより、他動詞の用法に制限が見られる理由を説明する。主語が目的語の変化をコントロールする力を持っている場合、他動詞文の使用が可能となるという結論を導く。

「-放題だ」における〈可能〉と〈結果状態〉の分析

新山聖也（筑波大学大学院生）

「-放題だ」は前接する動詞によって、可能の意味や結果状態の意味をあらわす。

- (1) ジュースが飲み放題だ。(可能)
- (2) 庭が荒れ放題だ。(結果状態)

本発表では、(1)のような例に関して可能文と比較し、(2)のような例に関しては結果状態を意味する述部と比較し、それぞれ分析を行う。第一に、可能の「-放題だ」は、意味や格パターンについて状況可能と共通点を持つ一方、状況の基盤に「制限の不在」という意味的条件を持つ点で特徴的と考える。第二に、結果状態の「-放題だ」も、自然発生の結果状態に限られ他動詞由来の結果状態が表せない点で「制限の不在」による結果状態をあらわすと考えられる。すなわち「-放題だ」における二種類の意味は「制限の不在」によって事態が成立するという共通の状況から導かれるものであると主張する。

「～カノ N」節を含む文の被修飾名詞
—被修飾名詞に立ちうる名詞の種類とは—

全弘起（名古屋大学大学院生）

本発表では「～カ+ノ+N(被修飾名詞)」節を含む文において、カ節と被修飾名詞の関係により文の分類を行い、被修飾名詞に立ちうる名詞の種類について発表する。このような文（以下では、カノ文と呼ぶ。）は、(1)と(2)のように同様の構造を持っていても、修飾節の「～カ」と後ろの被修飾名詞の関係には、ある違いがみられる。

(1) 何ができて何ができないかの区別ができる。

(2) 田中が見落としたか、無視したかの結果にすぎないだろう。

(1)は「何ができて何ができないかを区別する」に変えられるが、(2)はできない。一方、(2)は「田中が見落としたか、無視したか」により、その「結果」が付随すると解釈できるが、(1)はそのような解釈はできない。このように、カノ文は、カ節と N の関係により分類できる。また、その関係は N(被修飾名詞)の種類と関連しているようにみられる。

同時性に基づくトキ節の統一的分析

鈴木彩香（国立国語研究所）

本発表では、「(1)*太郎が寝ていた時に、花子が目を覚ます（だろう）。」「(2)太郎が寝ていた時に、花子は怒る（だろう）。」のような 2 つの例に着目し、①なぜ(1)が非文となるのか、一方で②同じ条件を持つ(2)がなぜ正文となるのか、という 2 つの問いに、トキ節の持つ「同時性」という意味的制約から統一的な説明を与える。①に対しては、従属節が状態述語かつタ形をとり、主節がル形をとる例は、相対テンス・絶対テンスのいずれを選択しても、「同時」と解釈することが可能な時間関係を示すことができないため非文となると主張する。②に対しては、(2)の従属節のタ形は観察時が過去にあることを示すものとなっており、従属節イベントのインターバルが基準時（主節イベント）を包含する意味的關係（＝「同時」と解釈できる時間関係）が可能となるために成立することができると主張する。

スケール名詞と連体節構造

東寺祐亮（日本文理大学）

連体節構造には、(1a)のようにスケール名詞が主要部名詞になっている場合がある。(1a)は、主要部名詞が具体的なモノを指す表現ではなく「回数」というスケールを表す抽象的な名詞になっていることで、連体節構造全体で連体節のデキゴトの回数を表している。

(1) a. [子供が図書館に行った] 回数 b. [子供が図書館に 3 回行った]

このような連体節構造に対して、江口 (2002) は、(1b)の「3 回」が関係節化して(1a)の「回数」になるという分析を提案している。しかし、(1a)を関係節化で説明しようとする、「3 回」が別の語に変化するといわざるをえなくなる。そこで、本発表ではスケール名詞や相対名詞が持つ意味的特徴を具体的に記述するというアプローチから連体節と主要部名詞の関係を捉え直すことで、(1a)の連体節の統語構造と意味解釈が体系的に説明されることを示す。

江口正 (2002) 「遊離数量詞の関係節化」『福岡大学人文論叢』第 33 巻第 4 号 : 1-21.

複合辞「ナクテハナラヌ」の成立

三宅俊浩（宇都宮大学）

複合辞ナクテハナラヌの成立史を明らかにすることを目的とする。中世室町期の資料を中心に調査した結果、15 世紀末～18 世紀に以下の過程を経たと考えるに至った。

- ①出現当初（室町期）のナクテハナラヌは、ナクテハ+ナラヌと分析される複文である。当期のナラヌは、同時期、ナラヌが獲得した不可能の意を表す（「ウソヲツク夏モ学問メモノヲシライデハナラヌトソ」玉塵抄）。これを原初的タイプと仮設する。
- ②ナラヌが不可能（望ましくない事態）を表すことから、望ましい事態の実現を志向する〈必要〉を表すようになる。その結果、構文的に助動詞化が認められる構文が現れる。
- ③虎明本では、条件句の形態や構文の観点から見て、文法化の過渡的段階を示している。
- ④近世にはナクテハナラヌが常に一つの助動詞として機能するようになった（文法化が完了した）ため、原初的タイプが現れなくなる。ここにおいて助動詞として確立する。

近代関西語を中心としたサセテモラウの発達
—サ入れ言葉の出現と意志用法の伸長—

山口響史（大阪大谷大学）

近代関西語の使役助動詞+テモラウ（サセテモラウ）の発達について観察する。具体的には、近代以降発達する①使役者が不明確な用法②使役者の想定が不可能な用法③与え手から誘いかけを受けた上での応答用法④与え手に利益があると目される用法の出現が意志用法の発達（とりわけ、「与え手＝聞き手」となる場面）の中で観察が可能であることをみる。また、サ入れ言葉の例が③用法の特に与え手（聞き手）への配慮が必要な場面で用いられていることを確認する。その上で、①～④の発達を使役助動詞の表す意味と意志用法との関係の中で説明する。さらに、テモラウにおいても、サセテモラウの①③④に相当する用法がみられることをふまえ、テモラウ全体で与え手（聞き手）への配慮表現としての用法が発達しており、サセテモラウの発達もその流れの中で捉えられることを述べる。

付帯状況を表す非対格自動詞節の変遷
— 「袖ひちて」「面赤みて」の構造—

菊池そのみ（筑波大学大学院生）

本発表は「袖ひちてむすびし水のこほれるを」（古今和歌集）の「袖ひちて」のように、古典語において〈付帯状況〉を表す非対格自動詞のテ形節が節内に対象語（ガ格名詞句）を含む用例を取り上げる。先行研究では、このようなテ形節は現代語では「袖を濡らして」のように他動詞が用いられるという点で古典語と現代語とが異なっていることが指摘されているが、その変遷は明らかにされていない。本発表では上代～中世の用例調査を実施し、中世前期頃までは〈付帯状況〉を表すテ形節において〔対象語（ガ格名詞句）—非対格自動詞〕と〔対象語（ヲ格名詞句）—他動詞〕とが併存しているものの、それ以降は〔対象語（ガ格名詞句）—非対格自動詞〕が見られなくなることを指摘する。また、主に上代にはツツ節にも〔対象語（ガ格名詞句）—非対格自動詞〕の用例が見られることを示した上で、従属節分類を踏まえて〈付帯状況〉を表す節の構造の変化について分析する。

副詞「せっかく」の意味・機能の史的変遷

許 燕（桜美林大学非常勤講師）

本発表は、副詞「せっかく」の本質を追究する研究の一環として、近世および近代日本語における「せっかく」の意味と機能をその実証研究を通して追究するものである。具体的には、『日本語歴史コーパス（CHJ）』を活用し、江戸時代から昭和戦前までの実例 575 例を研究対象として検証した。本発表は、許（2020）に準じ、近世・近代日本語においても「せっかく」を〈副詞用法〉〈連体用法〉〈擬似述語用法〉の三つに分類し考察を加えた。結果、近世・近代日本語における「せっかく」の用法の分布について新たに図式化することができた。また、「のに」や「のだから」のような明確な逆接・順接の共起形式を用いない、現代語と異なる用法も多数考察できた。そして、「せっかく」が「すでに実現した」事柄にも冠し得るといふ、近世・近代語独自の性質が明らかになった。

許燕（2020）「現代日本語における副詞『せっかく』の意味・機能をめぐって」『桜美林論考. 言語文化研究』11, pp. 73-93